

# 「世界名作劇場」というアダプテーション

—『若草物語 ナンとジョー先生』にみる作品間のつながり

清水友理

はじめに

「世界名作劇場」は、一九七五年から一九九七年、及び二〇〇七年から二〇〇九年にかけて、フジテレビ系列日曜日夜七時三〇分頃の番組枠で放送された、(株)日本アニメーション制作のテレビアニメーション二十六作、及び劇場アニメーション二作の総称<sup>1</sup>であり、同社が著作権を持つメディアコンテンツの名称でもある。「世界名作劇場」の作品は、二〇二二年二月の時点でも二番組がCSで放送されているほか<sup>2</sup>、多くの作品が複数の動画配信サービスで提供されていることもあり、現在でも様々な層に視聴されている。

「世界名作劇場」が視聴されている事例としては、たとえば『女性セブン』の二〇二二年九月一六日号において「世界名作シ

リーズ総選挙<sup>3</sup>」という特集<sup>3</sup>がリアルタイム視聴世代への企画として組まれた。同じく二〇二二年には、東京オリンピックスケートボード女子ストリートの銅メダリスト、中山楓奈選手が、競技前に「世界名作劇場」の『あらいぐまラスカル』（一九七七）の曲を聴いていたと、インタビューで発言したことも話題になった<sup>4</sup>。コンテンツとして「世界名作劇場」が取り上げられる場合、ターゲット層は、先述の『女性セブン』のように、放送時に視聴していた世代になることが多い。それだけに、インタビュー当時、一六歳の中山選手がCSでの視聴をきっかけに、「ラスカル」を知っていたという事実は、「世界名作劇場」が今日まで世代を超えて知れわたり、新たな視聴層を獲得し続けているアニメーションの作品群であるという一端を示した点で重要であった。

ではこのように普及し続けている「世界名作劇場」とは一体どのような作品群なのだろうか。一言でいうと、欧米圏を主とする外国の古典的なりアリズム児童文学、いわゆる「世界名作」と呼ばれるような原作を、フジテレビ系列日曜日夜七時三〇分の放送枠でテレビアニメーション番組化したアダプテーションの作品群である。最大の特徴は、同じ傾向の番組を二〇年以上にわたり制作・放送したことで、放送枠がブランド化したことだ。そのため「世界名作劇場」の作品は、それぞれが独立しながらもブランドとして共通性を有している。「名作路線」<sup>6</sup>とも呼ばれるこの共通性は、いいかえれば外国の児童文学をテレビアニメーションに翻案する規格<sup>7</sup>といえる。ゆえに「世界名作劇場」の共通性を探ることは、日本における外国の児童文学のアダプテーションのパターンの一つを明らかにすることを意味する。従来の研究において、「世界名作劇場」は、各原作の翻案として取り上げられることが殆どで、シリーズ自体を対象とした研究は多くない。筆者が把握している限りでは、畠山兆子と、ひこ・田中<sup>8</sup>のものがあがるが、両者とも主眼は視聴者の物語理解や受容のあり方に置かれているため、外国児童文学をテレビアニメーションに翻案する規格としての「世界名作劇場」に着目した研究は、今のところ確認できていない。

しかし「世界名作劇場」の規格は、長期にわたって制作・放送されるなかで形成されていったものであり、初期から完全に確立していたわけではない。さらにシリーズ中期の『牧場の少

女カトリ』（一九八四）で視聴率の低迷が問題視されてからは、従来の傾向を踏まえながらも、より視聴率が獲得できる作品を目指し、シリーズのなかでの表現可能な範囲を模索する様子もみられる。たとえば、『ピーター・パンの冒険』（一九八九）のようなファンタジーや、『七つの海のティコ』（一九九四）のように原作のないオリジナル作品の登場がその例である。加えて「世界名作劇場」の作品は、ブランドとしての共通性をもってゐるものの、基本的にはそれぞれが独立しており、作品ごとに原作も違えば、制作スタッフも演じる声優も都度、入れかわる。だがまた一方ではすべての作品を同じ制作会社が手がけた背景から、スタッフや声優には複数の作品に参加したり、たびたび同じ組み合わせで起用されたりと、一つ一つは独立した作品でありながら、その間には連綿としたつながりが存在する。このような事情から「世界名作劇場」の共通性を探るには、単にすべての作品を比較するだけでは不十分であり、各作品をほかの作品との関連も含めて分析し、掘り下げる必要がある。

そこで本稿では、「世界名作劇場」の共通性を探る手がかりとして、一九九三年に放送された、第十九作『若草物語 ナンとジョー先生』（以後『ナンとジョー』）を取り上げる。『ナンとジョー』は、ルイザ・メイ・オルコット（*Louisa May Alcott* 一八三二—一八八）の『第三若草物語』（*Little Men* 一八七二）（以後『第三若草』）を原作とした作品である。『第三若草』は、ベア教授との結婚後にジョーが開いたブラムフィールド学園を舞台とし

ている。原作の物語は、生徒達の日常や成長を描いた様々なエピソードが積み重ねられた群像劇で、ダンとナットという二人の孤児の生徒が中心に置かれているものの、明確な主人公は存在しない。この原作を、生徒の一人「ノーティ（おてんば）ナン」<sup>10</sup>ことアニー・ハーディングという少女とジョーを中心に、一年間、全四〇話の作品として構成したのが『ナンとジョー』である。

『ナンとジョー』を取り上げる理由は次の三つである。一つ目は、本作が、一九八七年にこの番組枠で『若草物語』(Little Women 一八六八)をアニメ化した『愛の若草物語』(以後『愛の若草』)を意識して作られた点で、先行作との明確なつながりをもつからだ。二つ目は、本作が「世界名作劇場」のなかでも「久しぶりの名作らしい名作」<sup>11</sup>と評価されているからだ。この作品は制作の段階から「名作劇場らしい作品の復活」を目指して作られており、本作のため、当時スタジオジブリに在籍していたアニメーター、佐藤好春(一九五八―)が復帰したことはよく知られている<sup>12</sup>。この「名作劇場らしい作品の復活」とは、本作がそれまでの「世界名作劇場」作品、いかえれば「名作路線」を内包することを意味する。実際、本作にはシリーズを象徴する代表作の一つ『赤毛のアン』(一九七九)(以後『アン』)のオマージュがみられる。そして三つ目は、このように過去作品とつながりを持ちながらも、本作は先行作品にない新たな要素を備えた作品として独自性も有しているからだ。特に

本作で取り入れられた枠物語の構造を用いた過去の回想という演出は、のちの劇場版「世界名作劇場」にもみられ、後続の作品にも影響を与えたと考えられる。

これを踏まえ、本稿では次の三つに着目して『ナンとジョー』の分析を行う。まず、前作『愛の若草』と『ナンとジョー』の連続性と分離を検証する。次に本作が「名作路線」を内包した作品であることを、『アン』へのオマージュから明らかにする。さらに本作の独自性を、ナンとジョーという世代が異なる二人の女性の主人公化、及び物語構造の二点から検討する。これらに着目することで、「世界名作劇場」の作品をつなぐ連続性とつながりをあぶりだし、シリーズの共通性を検討する手がかりにしたい。

### 一・『愛の若草』と『ナンとジョー』の連続性と分離

『ナンとジョー』が『愛の若草』の続編にあたるのかどうかという点は、ファンの間でも議論の的になった箇所である。代表的な考察には、ちばかおりの「ナンとジョー先生は愛の若草物語の続編か?」<sup>13</sup>がある。この考察でも指摘されているが、『ナンとジョー』を『愛の若草』の続編とみる根拠の一つには、同じ声優が同じ配役で起用されたことがある。実際『ナンとジョー』には、次の声優が『愛の若草』と同じ役で登場する。ジョー：山田栄子(一九五三―)、メグ：潘恵子(一九五三

―)、メアリー・マーチ：中西妙子(一九三二―)、ローリー：飛田展男(一九五九―)、ジョン・ブルック：小島敏彦(一九四〇―)。この声優の起用が、前作からの連続性を意識した表れであることは、『ナンとジョー』の監督、楠葉宏三(一九四七―二〇一八)の「もちろん『若草物語』のその後の話として意識して作りました。声優さんも、例えばメグは潘恵子さん、ジョーも山田栄子さん以外に使うわけじゃないですからね。」の言葉からもみとれる。

一方『ナンとジョー』が『愛の若草』の続編にあたらないとされる根拠には、両作の舞台設定が異なるという点がある。『愛の若草』では舞台が、架空の町ニューコードとなっていた。設定がこのように決まった背景には、『愛の若草』の前年に放送された『愛少女ボリアンナ物語』(一九八六)において、原作の『若草物語』の舞台であるコンコードでロケーションを行ったため、背景が同じにならないように架空の町を設定する必要性に迫られたという事情があった<sup>15</sup>。だがこのニューコードの設定は、『ナンとジョー』には引き継がれなかった。

「世界名作劇場」では、原作を一年間のアニメーションに翻案するため、プロットの順序を変更したり、オリジナルのエピソードや登場人物が盛りこまれることが間々あるが、そのなかでも『愛の若草』は、先述した舞台設定以外に、ストーリー上にも大きな変更があった作品の一つである。原作の『若草物語』は、南北戦争に出征した父親が不在のなか、四姉妹が母へのク

リスマスプレゼントを相談しあう場面から始まる。一方『愛の若草』では、ゲティスバーグの戦いに巻き込まれた一家が、戦火をさけるため、ニューコードの大叔母のもとに身を寄せ、新しい家を探すというオリジナルストーリーが四八話中、一〇話以上にわたって展開される。(なお原作の冒頭のエピソードが描かれるのは、二一話である。)またストーリーの中核は原作と同様に次女のジョーが担うものの、全体の語りを務める視点人物が末っ子のエイミーとなっているのも大きな変更箇所だ。

これと比較すると、『ナンとジョー』では舞台設定が原作本来の舞台であるコンコードに戻っている。また登場人物の名前も、ジョーはジョーに、『愛の若草』ではカール・ブルックと変更されていたメグの結婚相手も、本作ではジョン・ブルックと原作の翻訳に近い名前になっている。さらに前作で語りを担当したエイミーは、本作には登場しない<sup>16</sup>。加えて『ナンとジョー』は、ナンを主人公にエピソードを構成し直しながらも、基本的には「原作に忠実にアニメ化する<sup>17</sup>」をモットーにしており、原作の一部を膨らませることはあっても、前作のように完全なオリジナルのストーリーが展開されることはなかった。こうした箇所からは、前作とのつながりは維持しつつも、より原作の世界観に近い新たな作品を作ろうとする本作の制作者の姿勢をみとれる。実際、本作のプロデューサーの中島順三(一九三八―)は、前作の続編ということとどの程度、意識したかという問いに対し、次のように答える。

それは、意識しましたけど、基本的には、ジョー先生も子供のとくと大人になってからでははっきりと違いますし、周りにいる子供たちは全く新しいキャラクターですから。タイトル的には続編になっていても、中身は全く別物ということで、あまりプレッシャーは感じませんでした。<sup>18</sup>

以上をまとめると、『ナンとジョー』は同じ声優を起用するなどの点で『愛の若草』の続きものとしての側面を有しているが、完全な続編ではなく、原作の『第三若草』を翻案した別個の新しい作品に位置づけられているといえる。

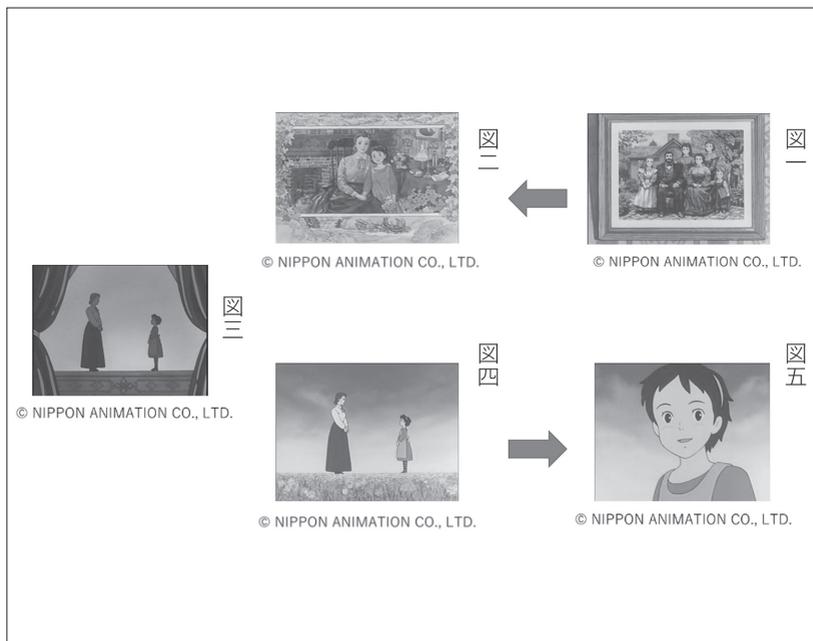
この傾向がよく表れているのが、『ナンとジョー』の一話から三話に挿入されたアバンタイトルからオープニング曲の序盤をつなぐ演出である。アバンタイトルとは、テレビアニメーションやドラマにおいて、オープニング曲の前に流れるプロローグ箇所のことをいう。『ナンとジョー』の一話から三話に挿入されたアバンタイトルからオープニングへの流れには、かつての『愛の若草』から『ナンとジョー』にバトンが引き継がれ、新しい物語が始まる様子が端的に示されている。

構成は次のようになっている。まずモノクロの写真<sup>19</sup>（図一）のカットが映ると、次の語りが入る。「若草物語の四姉妹、メグ、ジョー、ベス、エイミー。月日は流れ、夢見る少女たちもいつしか大人になりました。<sup>20</sup>」この語りの間にカメラは写

真一にズームアップし、「月日は流れ」の箇所からジョーの姿だけがカラーに変わっていく。そして語りが次の文、「あの勝ち気なジョーも結婚し、希望に溢れる人生を歩みだしたのです<sup>21</sup>。」を言い始めると、画面は大人になったジョーとナンのカラー写真（図二）に変わる。この語りが終わるとオープニングの序奏が始まる。画面も舞台のカーテンが開いていくカットに変わり、カーテンが開くと、暗いなかで向かい合うジョーとナンが映る。（図三）ここでタイトルバックが入り、それが終わると、画面は明るくなり、背景も花畑に変わる（図四）。ここからカメラがナンの横顔をクローズアップすると、彼女の身体が動いて視聴者に視線を向ける（図五）。すると序奏が終わり、曲の詞が始まるという流れになっている。

写真一の四姉妹のモノクロカラーは過去の時間を、一の写真のなかで本作『ナンとジョー』の中心人物であるジョーのみに色がついていくのは彼女が前作から過ごしてきた時間を、そして写真二のジョー先生とナンのフルカラーは現在の時間をそれぞれ示している。このアバンタイトルからオープニングの冒頭までの一連の流れは、『ナンとジョー』が前作という過去を内包しながら、別の作品として新たな物語の幕を開けるといって、本作の位置づけそのものを象徴している。

このアバンタイトルが挿入されたのは、全体のストーリーのなかでもナンの登場編にあたる導入パートと一致する<sup>22</sup>。注目に値するのは『ナンとジョー』の導入パートには、『愛の若草』



だけではなく、ほかの「世界名作劇場」作品へのオマージュもみられることだ。その作品とは「名作路線」を象徴する代表作の一つ、『アン』である。

## 二、過去作品へのオマージュからみえるもの…

### アンとナンの対比

一般にテレビシリーズの序盤のエピソードは、視聴者を作品世界に導入する重要なパートであり、その作品の特徴や方向性がよく表れるものだ。本作でもそれは同じで、全四〇話のなかで、最初の一か月に放送された第一話〜四話（一話「プラムフィールドへようこそ」、二話「川と野原はステキな教室!!」、三話「イチゴつみと黒い森」、四話「約束の小箱」）は、ナンが初めてプラムフィールド学園に来て、ジョーと心を通わせるなかで新しい生活になじむという、ナン登場編といえる展開になっている。この四話で構成されたストーリーには、ナンとジョーという二人の女性を主人公に学園での生活を描くという、本作の方向性が顕著にあらわれている。これが本作の独自性であることは次項で検証するが、その前に本項ではこの導入部分における『アン』へのオマージュを指摘する。オマージュは、制作者の先行作品へのリスペクトであり、先行作を下敷きに新たな物語を作るといふ姿勢そのものである。このオマージュを分析することで、本作が『愛の若草』だけでなく、「世界名作劇場」

の過去作品、いいかえれば「名作路線」のあり方や歴史を内包していることを明らかにし、そのうえでどのように新たな作品を作り上げたのかという、次項の考察につなげたい。

先にも述べたように『アン』は、「世界名作劇場」のなかでも代表作の一つだが、それは視聴者の人気があったというだけでなく、制作者の間で「名作路線」を象徴する代表格として認識されていたことも意味する。実際、「ナンとジョー」の多くのスタッフが、本作、及び「世界名作劇場」作品に関わるうえで『アン』が持つインパクトの大きさを明かしている。たとえば楠葉宏三は、『アン』を「私にとつての最高峰<sup>23</sup>」と評し、同作の高畑勲監督（一九三五―二〇一八）の演出に強い影響を受けたと語る<sup>24</sup>。また佐藤好春作画監督も、『アン』のキャラクターデザインを務めたアニメーター、近藤喜文（一九五〇―一九九八）が自分の原点であり、「アンのキャラクターデザインが僕にとつての「名作」<sup>25</sup>」と述べる。加えてこれも先述したように、「ナンとジョー」の制作背景には、「名作劇場らしい作品の復活」を目指すという意図があった。これらを踏まえると、本作が『アン』の影響を受けていると考えるのは、ごく自然な解釈といえる。

『ナンとジョー』には『アン』へのオマージュを感じさせる箇所が随所にあるが、とりわけ顕著なのが導入パートである。そのなかでも一話のエピソードの設定や展開には、『アン』の一話「マシユウ・カスバート驚く」を下敷きにした部分が多くみ

うけられる。『アン』の一話の展開は、次のようなものだ。グリーンゲイブルズのカスバート兄妹と暮らすためプリンス・エドワード島にやって来たアンは、ブライトリパー駅で一人、迎えを待つ。兄のマシユウが馬車で彼女を迎えに来る。自分の到着を心から喜ぶアンに、マシユウは、実は引き取りたいのは男の子なのだということが出来ず、家に連れていくが、道中で彼女のお喋りに魅了され、彼女の理解者になっていく。これに対し『ナンとジョー』の一話は、大人になったナンが過去を回想する場面から始まるが、（この部分は次項で考察する）メインのエピソードは、ナンが、プラムフィールド学園に入学するためコンコード駅に降り立つ場面から始まる。ジョーは夫のベア教授と馬車で彼女を迎えに行く。だが「ビーっとして何かを待つてるなんて、世界で一番苦手なの」<sup>26</sup>というナンは、ジョーの到着を待ちきれず一人で学園に向かい、ほかの生徒と騒動を起こす。しかしジョーはそんなナンを「あなたって何て素敵な子なの！」<sup>27</sup>と歓迎し、彼女の理解者になる。

まとめると『アン』と『ナンとジョー』の一話は、次の三点の点で共通している。一点目は主人公の少女が新しい環境にやって来ること、二点目はその環境で自分の最初の理解者となる人物と出会うこと、三点目は一人で駅に着いた少女が理解者となる人物の迎えを待つ場面から物語が動き出すことだ。原作の『第三若草』では、ナンは初登場の時点で過去にこの学園に来たことがあると示唆されており、アニメ版のナンのように突然、

新しい環境に来ることになったわけではない。またジョーやベアが彼女を駅に迎えに行ったり、ナンが一人でいきなり学園に来てしまったりするエピソードもない。これらの点からも『ナンとジョー』の二話は、原作というより『アン』の二話を下敷きにしたオマージュといえよう。

このオマージュには、二つの効果がある。一つは『アン』の傾向を踏襲することで、導入パートにおけるナンの物語が創出されることだ。『アン』は、原作でもアニメ版でも、彼女がカスバート兄妹に受け入れられ、「グリーンゲイブルスのアン」になる過程が丁寧に描かれている。他方『第三若草』では、ナンは最初からプラムフィールドを知っており、新しい環境で居場所を得ようとする葛藤がない。だが『ナンとジョー』では、『アン』のエピソードを取り込むことで、ナンがプラムフィールドに自分の居場所を見出す過程を、つまり彼女が「プラムフィールドのナン」になるまでの物語を創りだすことに成功している。二つは、アンとナンの物語をリンクさせることで、ヒロインの対比構造が生まれていることだ。駅で迎えを待つという同じ状況に置かれたとき、空想しながらも一人じっと迎えを待つアンと、自ら学園に歩き出してしまふナンの行動は対照的である。ここからはナンが従来の「名作路線」を踏襲した物語のなかにありながらも、それまでの主人公とは異なる新しいヒロイン像を意図して作られたキャラクターであることが窺える。興味深いことに、このヒロインとしてのアン、ナン、そして

ジョーの対比は物語だけでなく、声優の配役にも表れている。声優の配役が作品につながるをもたせる際に大きな効果を持つことは前項でも指摘したが、実は『ナンとジョー』と『アン』の間にも配役によるつながりが存在する。というのもジョー役の山田栄子は、『アン』のアン役でデビューした声優なのだ。他方ナン役の松倉羽鶴（一九六八）は、この作品が本格的な声優デビューであった。この声優によるアン、ナン、ジョーのつながりは、ファンブックでも次のように取り上げられた。

ヒロインのナンを演じた松倉羽鶴は、舞台出身の役者。当時はまだ新人で、声優としての仕事も『ナンとジョー先生』が初めてだった。一方、ジョーを演じた山田栄子も『赤毛のアン』で、いきなり主役デビューした経験の持ち主。かつての自分が重なって見えたのか、アフレコスタジオでは、つねに後輩をあたたく見守る先輩……という感じだったらしい。まさに、ジョーとナンそのままである。<sup>28</sup>

これを踏まえると、一話でナンを歓迎するジョーのセリフは、かつてアン役を務めた声優が、過去の自分と同じく「世界名作劇場」でデビューする後輩を見守る状況とオーバーラッピングしており、作品世界の関係性にも説得力を与えている。

さらに実は『ナンとジョー』では、アンとマッシュウの関係も

オマージュとして取りこまれている。学園で働く農夫サイラスは、原作でも子どもに親しまれる存在だが、アニメ版ではナンとジョーの理解者として原作よりも役割が大きくなっている。それはこの役の声優が『アン』のマッシュウを務めた槐柳二（一九二八―二〇一八）だったことが影響しているのは、まず間違いない。サイラスはまだナンがジョー以外にはよく思われていない二話の時点で、既に彼女の理解者となっており、ナンの授業づくりに協力する。また少し後のエピソードになるが、一六話「学校が燃える！」では生徒の一人、タンとの接し方に悩むジョーを、サイラスが励まし、見守る姿が描かれる。このマッシュウとアンの関係を下敷きにしたサイラスのキャラクターは制作者から視聴者への目くばせといえる。それは長寿番組枠の遊び心であるとともに、作品間のつながりの裏付けでもある。

このように『ナンとジョー』は、前作『愛の若草』だけではなく、「世界名作劇場」の過去作品である『アン』もオマージュの形でとりこんでいる。しかしそのオマージュは、決してそれまでの作品を焼き直すというのではなく、それらが作り上げた土台を継承したうえで新たな物語を作るという制作者の姿勢の表れである。そうした本作の独自性は、ナンとジョーとは対照的なヒロイン像に造形した点に加え、ナンとジョーという世代が異なる二人の女性を主人公化した点、及び枠物語の構造を用いた過去の回想という演出にもみられる。

### 三、「ナンとジョー」の独自性：二つの目線とノスタルジア

『ナンとジョー』はそのタイトルが示す通り、ナンとジョーという世代が異なる二人の女性を主人公としている。この二人は、もともと原作の『第三若草』でも相通じるものをもつキャラクターとして描かれているが、本作では二人の類似性がより強化されている。最初にそれが明確に提示されるのは、『ナンとジョー』の導入エピソードの最終話、四話の「約束の小箱」である。この話は三話の「イチゴつみと黒い森」から続く二話連続のストーリーだ。この二つの話は、原作の第二章「ハックルベリー摘み」を再現したものである。原作のあらすじは次の通りだ。生徒がハックルベリー摘みに行く→ナンが言いつけを破り迷子になる→発見される→ジョーがかつて、自分が母親にされたものと同じ罰をナンに与える→和解する。このエピソードは原作でもナンとジョーの類似性を感じさせるものだが、アニメ版ではそれがジョー自らのセリフでも語られる。和解の場面で、ジョーはナンに「あなたはそっくりだわ、ジョセフィンに。おてんばで、意地っ張り、男の子に負けたくなくて、自分をジョーって呼んでいた女の子にね。」<sup>30</sup>と言う。さらにオリジナルの要素として、ジョーがナンにかつて自分が母親にもらった約束の小箱を渡すエピソードも挿入されている。これによって、ジョーがナンに少女時代の自分を見出していること、及びナンとジョーが双子のような類似性をもつことがより強調

される。小箱を渡すとき、ジョーはナンに次のように語る。

（前略）今日から言いつけを破りたくなったら、その気持ちをご箱に閉じ込めてしまいなさいって。その日から、私はこの箱に色んなわがままを閉じ込めたわ。したくてたまらないはずらや冒険を。（略）いつか返してくれるわね、あなたのわがままをいっぱい閉じ込めて<sup>31</sup>

するとナンは「ありがとう、先生……（略）もう先生を心配させるようなことはしません、先生！」<sup>32</sup>と、涙ながらにジョーに飛びつく。この場面はナンがジョーと心を通い合わせた瞬間であり、新参者の彼女が「プラムフィールドのナン」になったときでもある。これでナン登場編は終わり、以後は学園の生徒としてのナンの日常が描かれていく。

特筆すべき点は、こうしたエピソードにおいて、ジョーに対するナンの目線とナンに対するジョーの目線の両方が描かれていることだ。これはジョーがナンの導き手としてのみ存在するのではなく、視点人物としての役割も持ち、物語における主人公の一人としてナンと同格に位置づけられていることを意味する。つまり『ナンとジョー』は、プラムフィールドの生活を、ナン（子ども）の目とジョー（大人）の目、二つの世代の目線から描いているのだ。本作において大人と子どもの二つの目線への意識があつたことは、監督の言葉にも示されている。

楠葉「（前略）ナンを主人公に立てて、もう一方でナンを取り巻くジョー先生を含めた大人たちを描く……という意識がありましたね。ナンの成長が縦糸にあつて、ジョー先生やベア先生、それに関わる大人たちの子供の見守り方が横糸にある……」<sup>33</sup>

この二つの目線とは、いいかえれば作品をみる視聴者の目線、すなわち母親と子どもの目線である。実際、「世界名作劇場」の主な視聴層として制作側が意識していたのも、母親と子ども<sup>34</sup>であった。このことからナンとジョーという世代が異なる二人の女性を主人公化した背景には、母親と子ども、二つの世代の視聴者の目線を代表し、共感できる人物を配置する意図があつたことは間違いない。母親の目線を代弁する登場人物は、『愛の若草』のメアリーや『アン』のマリラなど、過去作品でも描かれてきたが、子ども視聴者の目線を担う主人公と同格に位置づけたのは、本作が初めてであり、独自の特色といえる。

加えて実は本作に描かれた大人の目線は、ジョーのものだけではない。前項でも言及したように『ナンとジョー』の一幕のメインのエピソードは、ナンがコンコードの駅に着く場面から始まる。だが一話のストーリー自体は、プラムフィールドを卒業して医師となった二二歳のナンが、一〇年ぶりに学園に里帰りする場面から始まる。最初ナンは見慣れない立派な校舎にや戸惑いをみせ、そこから次のモノログが始まる。

大人になると誰もが忘れてしまう。自分がかつては子どもだったことを。子ども時代にどんな思い出をもったかで、大人の人生が決まるのだ。私はそう思う。懐かしいプラムフィールド、子どもの頃、ここで描いた夢。(中略) そんな魔法のような思い出がなければ、私は全く別の人生を歩んでいたに違いない。<sup>35</sup>

だがかつて自分が過ごした校舎もそのままに残されているのを見ると顔を浮かべ、建物に視線を移す。すると誰もいない校舎から子どもたちの笑い声が聞こえ出し、子ども時代のナンと仲間が走り回る姿が浮かびあがっては消えていく画面が二度、繰り返し返され、再びモノローグが入る。

そのとき、私はまだ一一歳、この学園との出会いが、先生との出会いが、生涯にたった一度の美しい奇跡であることに気づいてもいなかった……ただいま！ジョー先生！！<sup>36</sup>

そして二二歳のナンの顔がアップになると、次の瞬間、画面はコンコードの駅舎に切り変わり、一一歳のナンが駅に到着する場面が始まる。ここまでの説明が長くなったが、つまり『ナンとジョー』で描かれるプラムフィールドの生活は、ナンの思い出であり、本作は大人になったナンが過去の回想を語るという、

杵物語の構造になっているのだ。実際、本作の最終話は、回想を終えた現在のナンが懐かしいジョーを見つけ、その胸に飛び込んでいく姿をひきで捉えた場面で終わっている。

この一話と四〇話で提示された杵物語の構造は、二・三九話では伏線が回収されなかったため、(たとえば随所に大人のナンのモノローグが入るといったことがなかった)演出に対する物議をかもした<sup>37</sup>。しかし視聴者にこの回想がどこまで意識されていたのかはさておき、この四〇話の物語がすべて大人のナンの回想であるのならば、ナンとジョーという双子のような類似性をもった世代の異なる二人の女性の主人公化は、別の意味を帯びてくる。それは一人の女性の過去と現在(未来)の姿である。本作ではプラムフィールドでの生活が、ナンとジョーという二人の女性の視点から描かれたというのは先述した通りだが、ここに内包された語り手としての現在のナンの存在を考慮すると、子どものナンに向けたジョーの目は、現在のナンが過去の自分を見つめるまなざしと解釈することもできる。つまり『ナンとジョー』は、一人の女性が過去の思い出を語ることで、自分の原点を思い起こす物語でもあるのだ。こうした杵物語の構造、及び登場人物が過去を回想するという形式は、それまでの「世界名作劇場」作品にはみられない演出であり、本作の独自性である。

ではこの自身の過去を振り返るといって、一種のノスタルジア的な要素は、何のために取り入れられたものなのか。その答え

は、本作の放送時に『世界名作劇場』が一九九一年目を迎えた長寿番組となっていたことにあるのではないか。一九九一年という年数は、かつて子ども時代に親とともにこの放送枠を視聴していた世代が、親となって子どもと一緒に視聴していてもおかしくない長さである。いや、むしろそうした二世・三世代間にわたって継承される番組を目指した原点回帰として「名作劇場らしい作品の復活」を図ったのかもしれない。そう考えると、本作の枠物語による回想が真にアピールしていたのは、ナンのモノローグでも語られているように、「かつて子どもだった今は大人の視聴者」なのだろう。

この枠物語の構造を用いた過去の回想という演出は、その後、制作されたリメイク版の劇場アニメーション『The Dog of Flanders』（一九九七）や『MARUKO母をたずねて三千里』（一九九九）でも使用された。もちろんリメイクという性格上、過去作品を踏まえながら新たな解釈の作品をつくるという姿勢は当然である。だがそもそも、このような過去作品への志向、いかえれば「世界名作劇場」シリーズにおけるノスタルジア路線を最初に提示したのは、前作『愛の若草』やシリーズの代表作『アン』を取り入れる形で、「名作路線」を内包しながら、新たな世代を対象とした作品を作り上げた『ナンとジョー』である。その意味では『ナンとジョー』は、「世界名作劇場」シリーズにおける転換点の一つであり、同シリーズの作品間をつなぐ連続としたつながりを象徴する作品といえる。

## おわりに

本稿では「世界名作劇場」の共通性を探る手がかりとして、第一九作『若草物語 ナンとジョー先生』を次の三つの点から分析した。一点目は前作『愛の若草』との連続性と分離である。二点目は『アン』へのオマージュにみる「名作路線」の内包である。そして三点目は、ナンとジョーという世代が異なる二人の女性の主人公化、及び枠物語の構造を用いた過去の回想という演出に、本作の独自性がみられることである。その結果、次のことが明らかになった。それは、本作が過去の「世界名作劇場」作品、いかえれば本シリーズで形成された外国の児童文学を日本のテレビアニメーションに翻案する規格としての「名作路線」を踏襲しながらも、新しい世代に向けた新たな作品を作り上げたこと、特にシリーズにおける過去作品へのノスタルジア志向の要素を初めて導入した点で、一つの転換点をなすことだ。こうした過去作品との共通点や相違点からみられる本作の特徴は、「世界名作劇場」が、一つ一つは別個の作品でありながらも、同じ制作会社がついた商業アニメーションとして連続としたつながりを持ち、そうしたつながりが「名作路線」といわれるシリーズの規格を作り上げ、拡張したことを示している。

これを踏まえると、「世界名作劇場」の共通性を明らかにするには、物語の翻案のされ方だけではなく、商業アニメーションとしての枠組みの特性、及びスタッフや声優といった制作者

も考慮する必要があることがみえてくる。商業アニメーションは、スポンサーなど様々な制約や背景のうえに作られる。またアニメーションには総合芸術の面もあり、絵・脚本・演出・動き・背景・音楽・声など、多様な要素から一つの作品が構成されるため、ストーリーのみで評価することはできない。本稿の分析結果は、従来の翻案・受容研究で重視されてこなかったこれらの要素も、外国の児童文学をテレビアニメーションに翻案する規格の一つとして捉える必要性を示唆する。

とりわけ顕著だったのがアニメーションにおける声優の影響力の大きさだ。声優は、異なる作品につながりをもたせたり、キャラクターの造形にも影響を及ぼしたりする。加えて声の要素は、「世界名作劇場」に留まらず、同じ原作の別の翻案にも影響を与えている。たとえば『小公女セーラ』（一九八五）でセーラとミンチンを務めた島本須美（一九五四）と中西妙子は、イギリスのテレビ映画『小公女』（*The Little Princess* 一九八六）の吹き替え版でも同じ役を担当している。今後は、これらの点にも着目しつつ、「世界名作劇場」の作品群の共通性を探ってみたい。

#### 参考映像

『赤毛のアン』、本橋浩一制作、高畑勲監督、山田栄子、北原文枝、

五〇話、日本アニメーション、一九七九年

『愛の若草物語』、本橋浩一制作、黒川文男監督、潘恵子、山田栄子、四八話、日本アニメーション、一九八七年

『若草物語 ナンとジョー先生』、本橋浩一制作、楠葉宏三監督、松倉羽鶴、山田栄子、四〇話、日本アニメーション、一九九三年

#### 注

1 作品一覧は日本アニメーションのホームページを参照。（日本アニメーション「世界名作劇場 作品紹介」、日本アニメーション株式会社公式ホームページ、<https://www.nippon-animation.co.jp/work/michaku/>、二〇二一年二月三日参照。）ただし「日曜夜七時三〇分」の「世界名作アニメ」の定義は、版權などの点から諸説ある。特に一九七四年に放送された『アルプスの少女ハイジ』（以降「ハイジ」）は、版權が異なるため狭義の定義には含まれないが、シリーズの傾向を検証する場合、その方向性を提示した作品として取り上げることが多い。筆者も外国の児童文学を日本のテレビアニメーションに翻案する規格としての「世界名作劇場」に言及する際はこの立場をとる。後述の「名作路線」においても、「ハイジ」は包含される。

2 二〇二一年一月二時時点で、『あらいぐまラスカル』、『ペリーヌ物語』が放送されている。（日本アニメーション「放送情報」、日本アニメーション株式会社公式ホームページ、<https://www.nipponanimation.co.jp/broadcast/television/>、二〇二一年一

- 二月二八日参照。)
- 3 桜田容子取材・文「世界名作シリーズ」総選挙!、『女性セブン』第五九巻、三一〇号、小学館、七二一八〇頁、二〇二一年
  - 4 デイリースポーツ「あらいくまラスカル」スケボー娘のメダル獲得で再び脚光グズズモテモテ、Yahoo!ニュース、二〇二一年七月二八日配信、二〇二一年八月三十一日入手、<https://news.yahoo.co.jp/articles/407137ab4036cd404005eb093a2cd398ae57ae>
  - 5 清水友理「研究ノート：『世界名作劇場』研究の意義と方法——国境を超える児童文学——」、「グローカー研究」、第六号、成城大学グローカー研究センター、一九四—九五頁、二〇一九年
  - 6 『ハイジ』や『アン』の監督を務めた高畑勲はこのシリーズの傾向を「名作路線」と称し、次の論考にまとめた。(高畑勲「名作路線の発端、テレビでなければできなかったこと」、高畑勲「映画を作りながら考えたこと」、徳間書店、四六一—五一頁、一九九一年)
  - 7 清水「世界名作劇場」一九五—九六頁
  - 8 『小公女セーラ』(一九八五)を中心に、テレビアニメの形態にのっとって作られた物語のあり方や受容のされ方を分析した。(畠山兆子「原作と映像再話による受容者の物語理解と予測の考察…完訳『小公女』の読書体験がある大学生の場合」『梅花女子大学現代人間学部紀要』第九号、梅花女子大学、七一九—九〇頁、二〇二二年など)
  - 9 放送当時の「世界名作劇場」の受容のされ方を、原作の特徴にも着目しながら、七〇年—九〇年代の日本の時代背景と視聴者の分析から明らかにした。(ひこ・田中「五章 世界名作劇場」、ひこ・田中「ふしぎなふしぎな子ども物語…なぜ成長を描かなくなったのか」、光文社、二三八—二七四頁、二〇一一年)
  - 10 ルイザ・メイ・オルコット『第三若草物語』、吉田勝江訳、角川書店、一五六頁、二〇〇八年
  - 11 佐藤景一編『思い出の世界名作劇場オフィシャルガイド』、双葉社、九二頁、二〇〇三年
  - 12 ちばおおり『世界名作劇場シリーズ、メモリアルブック：ヨーロッパ編』、新紀元社、三五四頁、二〇一〇年
  - 13 ちばおおり『世界名作劇場シリーズ、メモリアルブック：アメリカ&ワールド編』、新紀元社、一六二頁、二〇〇九年
  - 14 ちば『アメリカ&ワールド』三二七頁
  - 15 ちば『アメリカ&ワールド』一一三頁
  - 16 第三四話「雪の日の使者」のジョンの葬儀の場面で姿が映るのみである。
  - 17 太田修編『若草物語ナンとジョー先生 (Newtype illustrated collection)』、角川書店、一六九頁、一九九四年
  - 18 太田「ナンとジョー」一七三頁
  - 19 この写真は『愛の若草』のオープニング曲の写真を彷彿とさせるが、絵は本作のため書きおろしたもので人物配置も背景も異なる。
  - 20 「ナンとジョー」第一話アバンタイトル
  - 21 同右
  - 22 ナンの登場編は四話までだが、三—四話は二話連続の物語で、内容もナンが行方不明になるという緊張感のあるもので、雰囲気を変えないよう挿入しなかったと考えられる。
  - 23 ちば『ヨーロッパ』三五一頁

- 24 太田『ナンとジョー』一六三頁  
 25 ちば『ヨーロッパ』三五六頁  
 『ナンとジョー』第一話  
 26 『ナンとジョー』第一話  
 27 同右  
 28 佐藤景一編『思い出の世界名作劇場』九二頁  
 29 オルコット『第三若草』二五六―二九二頁  
 30 『ナンとジョー』第四話  
 31 同右  
 32 同右  
 33 アイブランニング編集『対談』監督楠葉宏三×脚本島田満  
 (二〇)、『若草物語』ナンとジョー先生』DVD二巻、二〇〇  
 二年  
 34 太田『ナンとジョー』一六二頁  
 35 『ナンとジョー』第一話  
 36 同右  
 37 アイブランニング編集『対談』監督楠葉宏三×脚本島田満  
 (四)、『若草物語』ナンとジョー先生』DVD四巻、二〇〇  
 二年